

古代語の「くはつ」について

徳 本 文

一 はじめに

古代語の「はつ」はさまざまな前項動詞について多くの複合動詞を形成し、補助動詞的な役割を果たしている。終了・完了を表すという点で類義の「をはる」が漢文訓読において使われるのに対して、「はつ」は和文において多用されており、文体によって使い分けられていたことが明らかにされている。

現代語では「おわる」は使用頻度が高く、「はてる」は限られた語にのみ結びついて特定の意味を持つ。しかし、「おわる」の造語力が高いと言っても、姫野（一九九九）^①に指摘があるように、「意志的な行為の完了・完成に使われる」という限定がある。一方、「はてる」は「つかれはてる」「あきれはてる」というような負の方向の変化や感情を表す前項動詞について、マイナス評価を強調する用法のみが使われている^②。

歴史的な流れを把握するために、十七世紀初頭に刊行された『日葡辞書』を見ると、「はつる」を後項とする複合動詞は「朽

ちはつる」「廃れはつる」「弱りはつる」等があり、ほとんどがマイナス評価の変化動詞である。「をわる」を後項とするものは「書きをわる」「申しをわる」等があり、「をわる」の項には「ある動詞の語根（連用形）に接続して、その語根の意味する動作が終了する意を示す」との記述が見られる。さらに、意志的な動作の終了・完了を表す複合動詞としては「食いはたす」「聞きはたす」等がある。この「はたす」は現代語では「使いはたす」等にごく限定的に使われるのみであるが、『日葡辞書』には「この動詞は多くの動詞の語根（連用形）に接続するが、その場合には、その語根の意味する動作をし終えることを示す」と説明されている。

ここで、次のような流れが考えられる。

1. 古代語において、「くはつ」は和文、「くをはる」は漢文訓読において、前項動詞の終了・完了を表していた。

2. 『日葡辞書』の時代までに、「くはつ」はマイナス評価の変化動詞・情態動詞のみを前項とするという現代語に近い意味に変化した。

3. 『日葡辞書』の時代には、変化動詞・情態動詞と結合する「は

つ」に対して、意志的な動作動詞には「をはる」とともに「はたす」がついて、その終了・完了を表すという用法があった。

4. その後、「はたす」はごく限られた語を残して「をはる・おわる」に吸収され、現代語の用法に至る。

この流れを念頭に、本稿では古代語の「はつ」の意味と用法を、前項動詞の種類とそこに加えられる評価の観点から見直したい。

二 先行研究

前述の通り、「はつ」と「をはる」については、先行研究によって和文Ⅱはつ、漢文訓読Ⅱをはるといって使い分けが定説となっている。

築島(一九六三)⁵⁾は訓点資料に使われる語彙と『源氏物語』の語彙を対照し、訓点資料にあつて『源氏』に見えない語彙と、『源氏』にも見えるが用法・用例が限られる語彙を「訓点特有語」としたが、「をはる」はここに含まれる。

大坪(一九七六)⁶⁾は、上代から平安時代の「はつ」「をはる」について広く論じ、奈良時代にはヲハルとハツは併用されていたが、平安時代にヲハルは漢文訓読でハツは和文で用いられるように変化し、さらに院政期以降、和漢混濁文で再び併用されるようになったとしている。また、二分化の原因として、もともとヲハルは公務に関する場で使われるあらたまった語であつたという事情も指摘している。

岡野(一九九六)⁸⁾は平安時代と鎌倉時代の物語、軍記物、説話集、女流日記から用例を集め、ジャンルごとに「はつ」と「をはる」の使われ方を分析した。それによれば、平安時代和文では「動作・事柄の終了」を表す動詞は専ら「はつ」であり、「をはる」は仏事の終了や人の死に限定して用いられていた。複合動詞の後項としても「はつ」が圧倒的に多く、さまざまな動詞とともに使われている。中世王朝物語では「をはる」の用法の拡大が見られ、中世女流日記ではさらに多くの「をはる」が用いられているが、「をはる」を後項とする複合動詞はない。説話では「をはる」と「はつ」がほぼ同数用いられており、複合動詞「はつ」も相当数見られる。軍記は説話と類似の傾向があるが、「はつ」はあまり例がない。

複合動詞の後項としての「はつ」と「をはる」がどのような前項動詞と結びついたかを調査したのが成(二〇〇三)⁹⁾である。成は『源氏物語』の「はつ」と『今昔物語』の「をはる」について前項動詞の限界性に着目して分析した。それによれば、『源氏物語』の「はつ」には完全性、時間性の二つの用法があり、前項が限界動詞の場合は完全性、無限界動詞の場合は時間性の用法になる。『今昔物語集』では「はつ」の前項動詞は限界動詞が多く、「をはる」は無限界動詞が多い。「はつ」は完全性、「をはる」は時間性の用法で使われる傾向がある。つまり、「はつ」と「をはる」には意味分担があつたのではないかということである。文体による使い分けだけでなく、意味の面での「はつ」と「をはる」の分担ということについて同意する点が多い。この「はつ」と「をはる」の意味分担と変遷についてさらに考察するため、まず

古代語の「ゝはつ」の意味と用法についてあらためて分析したいと考えた。

三 上代の「ゝはつ」

平安時代の用例について考える前に、上代の「ゝはつ」についてふれておく。

『万葉集』における「ゝはつ」は異なり語で2例、「こぎはつ」と「おいはつ」である。「はつ」には「終わる、死ぬ」という意味のほかに「停泊する」という意味もあり、「こぎはつ」はこれにあたる。「泊つ＝停泊する」も「果つ＝終わる、死ぬ」も源は同じ語であり、「こぎはつ」の「はつ」は補助動詞的な用法ではないが、「漕ぎ進んだ末に限界点でとまる」という点は補助動詞的な「はつ」の意味を考える上で基本になる。「おいはつ」は変化を表す動詞「老ゆ」について、その変化が極限に達していることを意味する。

(1) 吾船者 枚乃湖尔 榜将泊 奥部莫避 左夜深去来

(万葉集卷三・二七四)

わがふねは ひらのみなどに こぎはてむ おきへなさかり さよふけにけり

(2) 耆矣奴 吾身一尔 七重花佐久 八重花生跡 白賞尼 白賞尼

おいはてぬ あがみひとつに ななへはなさく やへはなさくと まおを

(万葉集卷十六・三八八五)

また、宣命には「しづまりはつ」と読んだ例がある。これは心情を表す動詞について心情の変化が完全であることを表す。

(3) 諸意静了奈牟後爾 諸の意(こころ)静まり了(は)てなむ後に

(続日本紀宣命・天平寶字三年六月十六日)
大坪によれば、この他に『歌経標式』に「阿介婆天奴(あけはてぬ)」があるとのことであり、補助動詞的な用法の後項動詞「はつ」が上代に存在していたことがわかる。

四 「ゝはつ」の意味

四・一 前項動詞

本稿では『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『源氏物語』の「ゝはつ」について分析し、さらに『平安時代複合動詞索引』¹⁰⁾から他の資料の用例を対象に加えた。また、分析にあたって、前項動詞は工藤(一九九五)¹¹⁾を参考に、主体動作動詞・主体変化動詞・情態動詞・静態動詞に分けた。

各資料における「ゝはつ」の異なり語数は次の通りである。
() 内に延べ語数を示した。

・『平安時代複合動詞索引』に記載された「ゝはつ」 301

竹取 4 (4) 伊勢 3 (3) 土左 なし

古今 11 (11) 後撰 22 (24) 拾遺 13 (14)

源氏 109 (299)

このように「はつ」は平安時代において大きな造語力を持っていたと言える。また、すべての種類の動詞に接続しており、意志の有無、継続性の有無、自動・他動等に関しても前項動詞に制限のないことが再確認された。『源氏物語』における「ゝはつ」の前項動詞は次の通りであるが、前項動詞に制限がなく多様である

ことは平安時代和文資料に共通している。

・主体変化動詞

明く 荒る 失ふ 失す 移る 移ろふ 翁ぶ おこたる
大人ぶ 叶ふ 枯る 離る 消ゆ 暮る 定まる 覚む
死ぬ 過ぐ 澄み上る 澄む 平らぐ 尽く 整ふ なる
紛る 領す 別る

・情態動詞

飽く 悔る 打ち解く 疎む 恨む (心) 落ちゐる
思し知る 思し離る 思す 思ひ上がる 思ひ知る
思ひ捨つ 思ひ立つ 思ひ離る 思ふ 親がる 心得 忍ぶ
知る 絶ゆ (心) 留まる 念す 惚る 怨す 忘る

・静態動詞

明かす あり 暮らす 過ぐす 住む 見ゆ

・主体動作動詞

明らむ 上ぐ あくがる 荒らす あらはす 離る
生く(下二) 否ぶ 言ふ 入る(四) 打つ 行ふ 講ず
飾る くだす 試む 越ゆ 御覧す 去る 従ふ したたむ
鎮む す 調ぶ 濯ぐ すまふ 削ぐ 背く 絶え籠る
助く 断つ 尽くす 作る 伝ふ 包む 梳く 流す なす
のたまふ 上る 弾く 舞ふ 見あらはす 見尽くす
見奉る 見給ふ(四) 見給ふ(下二) 見る もてなす
読む 寄る

・受身・使役(助動詞に接続したもの)

心おかる 怨ぜらる 読ます

四・二 前項動詞の完全な実現

ここであらためて、後項動詞「はつ」についての辞書の記述を見てみる。

『古語大辞典』¹³⁾

すっかり…する。最後まで…する。…し終わる。…しきる。

『源氏物語辞典』¹⁴⁾

終極までその動作又は状態つづく。(中途二テヤミ又ハ改マルコトナキ意) 為しおほす。しとほす。

これらの記述から、「限界」「極限」「完全」という意味が「はつ」の基本にあることがわかる。

四・二・一 変化動詞

前項が変化動詞の場合、基本的に変化が完全に実現したことを表す。

(4)消えはつる時しなれば越路なる白山の名は雪にぞありける

(古今卷九・四一四)

(5)今はとてうつりはてにし菊の花かへる色をば誰か見るべき

(後撰卷十二・八五三)

(6)夢の中なる心地のみして、覚めはてぬほど、いかにひが言多からむ。

(源氏・明石)

(7)限りありて別れはてたまはむよりも、目の前にわが心とやつし棄てたまはむ御ありさまを見ては、さらに片時たふまじくのみ

(源氏・若菜下)

(8)大臣の御処分、何やかやと尽きすまじかりけれど、行く方もなくはかなく失せはてて、御調度などばかりなん、わざとうるは

しくて多かりける。

(源氏・橋姫)

(9)かくておいたらば、死にはてはべりぬべし。

(源氏・手習)

(10)そのほどにもあらず衰へ果てたまひぬらむと思ふに、なほ見たてまつれ、なかなかいますこしらうたげなるさまの添ひたる

(夜の寢覚)

(7)では出家が「不完全な別れ」であるのに対して死別を「完全な別れ」としてとらえていることを「わかればつ」で表現しており、(9)では現在には死にそうな状態であるが、放っておくと「しにはつ」＝「完全な死」に至るとしている。どの例も、前項動詞の表す変化の度合い・程度が限界まで及んで完全であることを示す。

四・二・二 情態動詞

(11)かひはかく有ける物をわびはててしぬる命をすくひやはせぬ

(竹取)

(12)ひたすらに厭ひ果てぬる物ならば吉野の山に行方知られじ

(後撰卷十二・八〇八)

(13)もし世の中に飽きはてて下りたまひなば、さうさうしくもあるべきかな。

(源氏・葵)

(14)今はもう限りとあなづりはてて、さまざまに競ひ散りあかれし上下の人々、我も我も参らむとあらそひ出づる人もあり。

(源氏・蓬生)

(15)不定なることどももはべめれば、屈しはてて、また折らすほどにもやなりはべらむ。

(蜻蛉日記)

(16)よるづ倦じはてたまひて、つくづくと御おこなひにて過ぐさせたまふ。

(栄花)

(17)いたう悩めるけしきのをかしさにこそは、疎みはてさせたまうまじう御覧じけれ。

(狭衣)

情態動詞は前項動詞の実現の程度が話者の想定する限界まで達していることを表し、結果として前項動詞の深さ、強さの度合いを強調する表現となる。

四・二・三 静態動詞

前項動詞が静態動詞の用例では、多くの場合、前項動詞が時間的な限界まで及ぶことを表す。

(18)ありはてぬ命待つ間のほどばかり憂きこと繁く思はずもがな

(古今卷十八・九六五)

(19)古物語にかかづらひて世を明かしはてむも、こちごちしかるべければ

(源氏・橋姫)

(20)世の中にえありはつまじきさまを、ほのめかして言はむなど思すに

(源氏・浮舟)

(21)恥づかしげに見えにくき気色も、なかなかいみじくつまじきに、わが世はかくて過ぐしはててむ

(源氏・総角)

(22)この山里に住みはてなむと思ひたり。

(源氏・夕霧)

(23)心にくくもありはてず、とりはづせば、いとあはつけいことも出でくるものから

(紫式部日記)

(24)女君は、例の、世の憂きよりは、こよなく慰むこと多く「このついでに、かくてやがて住み果てなむ」と思しとるに

(夜の寢覚)

(19)の「あかしはつ」は前項動詞「明かす」自身が限界を持っており、その限界点＝完全に夜が明ける時までの意である。「あり」「住

む」「過ぐす」はそれ自体に限界を持たない動詞であるが、「ありはつ」「すみはつ」「すぐしはつ」等の例では、話者がそれが限界だと想定する時点を示し、多くの場合、寿命の限界点まで||最後まで・いつまでもという意味になる。

四・二・四 動作動詞

まず、前項動詞が限界まで完全に実現したことを表す例をあげる。

- (25) さらにこの物の怪去りはてず。(源氏・若菜下)
(26) この女奥へも入りはてざりければ、あやしがりて、さしのぞきたり。(平中)

(27) 中納言殿は京出ではてたまひて、丹波境にて馬乗らせたまひぬ。(栄花)

これらの前項動詞は主体動作動詞であると共に主体変化動詞でもあるため、その動作をすることによって、変化が程度の限界まで完全に実現したことを表す。

(28) から(34)は前項動詞の動作を及ぼす対象のある語である。

(28) 命にもまさりて惜しくあるものは見果てぬ夢の覚むるなりけり(古今卷十二・六〇九)

(29) そこにありけるかたゐをきな、いたじきのしたにはひありきて、人にみなよませせてよめる。(伊勢八十一段)

(30) いとほしかりし物懲りに、あげもはてたまはで、脇息をおし寄せてうちかけて(源氏・末摘花)

(31) ただ四五月のうちに、史記などいふ書は、読みはてたまひてけり(源氏・少女)

(32) いかなることづけぞやと、言ひもはてず、走り出ではべりぬるに(源氏・帚木)

(33) 御薰物あはせはてて、人々にもくばらせたまふ。(紫式部日記)

(34) この事のはじめの、いみじうゆかしう、聞き果てまほしきに(夜の寝覚)

これらの前項動詞は内的にせよ外的にせよ限界を持つものであり、この場合の「はつ」は、前項動詞の動作が対象・範囲の限界まで及んでいて、対象や範囲に残りの部分がなく完全であるという意である。たとえば(31)の「よみはつ」は「史記を読む」という動作が「史記」全体・全巻に及んでいること、(28)の「みはつ」は「夢を見る」という動作が「夢」の結末までの全体に及ぶことを示す。

次に動作主体が複数である用例をあげる。

(35) みな起きはてぬれば、事行ひてふかす。(蜻蛉日記)

(36) ある限り下り果ててぞ、からうじて見つけられて

(枕草子・二六〇段)

(37) さべき人の妻子みな宮仕に出ではてぬ。(栄花)

(37) は妻子の出仕が終了・完了したということではなく、「みな」に視点がある。つまり、「出づ」という動詞の主体が「みな」に渡っていて残りがいないことを「はつ」が強調しているものである。(36)も女房達が全員車から下りた場面だが、「下りる」動作の終了・完了ではなく、「全員が」下りたことの強調である。

(38) さべき宮たちも皆うせはてさせたまひて、ただこの帝のみこそはおはしますぞいみじうおはせん(栄花)

(38) は動作動詞ではないが、前項動詞の変化が主体||宮たちすべて

に及んだという点で前項動詞の実現が完全であることを強調している。

また、静態動詞と同様に、前項動詞の限界の時点までという意味の例もある。

(39) 任せてこそいましばし御覧じはてめ。(源氏・真木柱)

(40) 残り少なき齢のほどにて、御ありさまを見はつまじきことと、命をこそ思ひつれ。(源氏・少女)

(28) の「みはつ」は夢を結末まで見る意であるのに対し、(39)「限界の時点」問題が解決して家庭の状況が落ち着く時点まで、(40)は孫を「限界の時点」孫が成長して自分が安心できる時点まで「見るといふ意味である。

(41) しぶしぶなりとも、まめやかに恨み寄らば、つひにはえ否びはてじ。(源氏・宿木)

(42) さる例もありければ、すまひはてたまはで、太政大臣になりたまふ。(源氏・澪標)

(43) 見出ではてぬるに、ためらひて、寄りて、なにごとぞと見れば(蜻蛉日記)

(41)、(42)は拒否や辞退の言葉を中断せずに言うということではなく、いつまでも言い通す意であり、「はつ」は「時間的な限界点まで」を示す。(43)は屋内から家族の旅立ちを見送る場面、限界点は家族の姿が見えなくなる時点である。

このように、後項動詞「はつ」は前項動詞が限界まで完全に実現したことを表すが、その限界には程度の限界、対象・範囲の限界、時間の限界がある。さらに、次の例は、能力・可能性の限界まで動作を行うという意味とも考えられる。

(44) さるべき契りありてこそは、我しも見つけめ、ころみに助けはてむかし。(源氏・手習)

四・三 帰着点を表す「はつ」

「限界まで・完全に」という意味が当てはまらない例がある。

『古語大辞典』(小学館)の「おもひはつ」の項には「考えた末に決める」とあり、また「なりはつ」には「すっかりなる」の他に「最終的になる」という記述がある。これらは前項動詞が限界まで完全に及ぶという意味とは少々異なる。

まず、「なりはつ」の用例を見てゆく。

(45) いとど人わろうかたくなになりはつるも、前の世ゆかしうなむ(源氏・桐壺)

(46) 夜に入りはてて、何とも見えずなりはてぬ。(源氏・螢)

これらは「少しそのような状態になる」段階から進んで「完全にそのような状態になる」ことで、前項動詞の変化が限界まで達したことを表している。前項動詞が完全に実現したことを表すのであれば、言外に部分的な実現との対比があると考えられるし、また、実現する状況が明らかでなければならぬが、次のように疑問詞とともに使われて実現する状況が不明である例が多々見られる。これらは実現の完全性を表すとは言えず、「最終的にそのようになる」例にあたる。

(47) 宮の思しのためはむこと、いかになりはてたまふべき御ありさまにか(源氏・若紫)

(48) かしこけれど、かくいとたづきなげなる御ありさまを見たてまつるに、いかになりはてさせたまはむと、うしろめたく悲しく

のみ見たてまつるを

(源氏・綏角)

このような「最終的に」という意味を持つ「〜はつ」は「なりはつ」以外にもある。

(49) かかるありさまを御覧じはてらるるより外の報は、いづこにかはべらむ。
(源氏・初音)

これは空蟬が尼になった姿を源氏に見られたくないという場面である。ここでは尼姿を「少し見る」か「完全に見る・最後まで見る」かという対比はなく、「見る」という動作の完全な実現という解釈はしにくい。関係↓拒絶↓離れた年月という長い関係の結末として尼姿を見られることになるのは嫌だということである。

(50) いづかたに寄りはつともなく、はてはてはあやしき事どもになりて、明かしたまひつ。
(源氏・帚木)

夜の間にさまざまにやりとりされた議論がどちらかがよいと決着することもなく夜明けを迎えたということで、「寄る」結論づけられることが完全だと解釈も成り立つが、長い議論の末の結論であると考えた方が妥当ではないだろうか。

(51) 若々しきもの思ひをして、つひにうき名をさへ流してつべきことと思し乱るるに
(源氏・葵)

「少しうき名を流す」に対する「完全に限界までうき名を流す」との意ではなく、若々しきもの思ひの結末と考えられる。

(52) 昔も今も、もの念じしてのどかなる人こそ、幸ひは見はてたまふなれ。
(源氏・浮舟)

(53) 人さまの思ふさまにめでたきに、かうもありはてなむと心寄せわたることなれば、うしろやすく導きつ。
(源氏・藤裏葉)

(54) いかなるついでにかは、もて離れて、人の推しはかるべかめる

筋を、心清くもありはつべき。

(源氏・藤袴)

(55) あまり年つもりなば、その御心ばへもついでにおとろへなむ、さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがな
(源氏・若菜下)

(52) はあせらず気長に構えている人こそ最終的には幸せになれるということ、で、「みはつ」でも(28)の「結末まで残りなく見る」や(40)の「時間的な限界まで見る」とは異なっている。(53)は柏木が妹と夕霧の結婚を望んでいたという場面で、幼い頃からの二人の長い関係が結婚として結末を迎えることを表す。(54)は玉蔓が人に誤解されている源氏との間柄をさっぱり清算したいという気持ちである。「いつまでも心清くあり」たい、あるいは「完全に心清くあり」たいのではなく、「心清くあり」という帰着点を望むとの意味であろう。(55)は紫の上が源氏の寵愛を失うという状況を見る前に出家したいと願う場面で、子供の頃から中年に至るまでの源氏との長い間柄の帰着点を示していると解釈できるのではないか。

このように、「〜はつ」には「前項動詞が限界まで及ぶこと」完全に実現すること」の他に、「長い事柄の帰着点として前項動詞が実現すること」という意味があると考えられる。

この意味と考えられる「〜はつ」の例を『源氏物語』以外の資料からもあげておく。

(56) このこと違ひはてなば、いかにもあれ、あるべきことかは、と思ひとぢめられ
(狭衣)

(57) いみじく思ふさまに定まり果てたまひぬとも、それを、さて聞
くべきにもあらず。
(夜の寝覚)

(58) 近くてなり果てんさま聞き果てはべらんとて(とりかへばや)

五 「くはつ」に付随する話者の評価

はじめに述べたように、現代語の「くはつ」は「疲れる」「呆れる」等のマイナスの意味を持つ変化動詞・情態動詞に接続し、その評価を強調する役割を持つ。「変わる」という動詞はそれ自体プラスでもマイナスでもなく中立だが、「変りはてる」という場合の変化は必ずマイナス方向である。上代にはマイナス評価の「おいはつ」とプラス評価の「しづまりはつ」が見える。では、平安時代の例はどうか。変化動詞と情態動詞を中心に見てみる。何をもってプラス、マイナスとするかはやや曖昧であるが、ここでは隆盛に向かう望ましい変化や喜び・楽しさ・安らぎのような感情をプラス、衰退に向かう望ましくない変化や悲しみ・嘆き・無常感・嫌悪のような感情を伴うものをマイナス評価とする。

四・一に『源氏物語』における「くはつ」の前項動詞を示したが、「荒る」「失す」「衰ふ」「枯る」「死ぬ」「絶ゆ」「悔る」「侘ぶ」等、マイナス方向の変化動詞、マイナスの心情を表す情態動詞が多い。一方で、「明く」「暮る」「覚む」のようにそれ自体プラスでもマイナスでなく単に変化を表すもの、「おこたる」「平ぐ」のようにプラスの変化を表すもの、「心得」「打ち解く」などプラス評価と言える情態動詞もある。四・二で取り上げた用例にはマイナス評価のものが多いが、以下のようにプラス評価を伴う用例も相当数見られた。

・変化動詞

(59) 深緑色あせがたに今はなりかつ下葉より紅に移ろひはてん

(60) 御前の菊うつろひはてて、空のけしきのあはれにうちしづるるにも
(拾遺卷九 五七二)
(源氏・宿木)

(61) 思ふさまにかなひはてさせたまふまではとり隠しておきてはべるべけれど
(源氏・若菜上)

(62) 琵琶はすぐれて上手めき、神さびたる手づかひ、澄みはてておもしろく聞こゆ。
(源氏・若菜下)

(63) 九月二十日のほどにぞおこたりはてたまひて、いといたく面瘦せたまへれど、なかなかいみじくなまめかしくて
(源氏・夕顔)

(64) 花はまだよくもひらけ果てず、つばみたるがちに見ゆるを折らせて
(枕草子二〇六段)

(65) 御かたち有様とどのほりはてて、いみじうあてやかにうつくしうなまめきたまへり。
(栄花)

(66) 村雲晴れ果つめるを、いかやうにてか、只今、かく御覧すらむとゆかしう
(狭衣)

(67) 葉があかく色づくさまであるから「あせる」「散る」といったマイナス評価ではなく望ましい変化と言えるだろう。(60)、(64)も同様である。(61)の願いが叶う、(62)の琵琶の音が美しい、(63)の病が癒える等、前項動詞自体がプラスの意味を持ち、後項動詞の「はつ」はよい方向への変化が完全に達成されたことを表している。

・情態動詞

(67) かくや姫の心ゆきはてて、ありつる歌の返しまことかと聞きて見つれば言のはを飾れる玉の枝にぞありける
(竹取)

(68) 思ひなくめやすきさまに静まりたまひぬれば、御心落ちるはてたまひて
(源氏・藤裏葉)

(69)めでたくすぐれて世に交じらひつきたまへば思し慰みはてつるに、うれしくいみじと思したる御気色、いとあはれなり。

(とりかへばや)

(67)は求婚者の嘘を知って結婚を免れたかぐや姫の晴れ晴れとした気持ち、(68)は息子の夕霧が身を固めたことに対する源氏の安堵である。

前述の通り、プラスでもマイナスでもない中立的なものも多い。たとえば「あけはつ」「くれはつ」などは、それ自体は単に変化が完全であることを表しており、それに付加される評価はその状況に左右される。これらのことから、古代語の「くはつ」は評価の面から考えると基本的には中立であり、プラスやマイナスの評価は状況に応じてなされていたと考えられる。ただし、「はつ」という動詞そのものの意味に加え、現在残されている和文資料の性質上、盛んになってゆくものよりも、衰え、消えてゆくものを描写することが多く、嘆き・無常感・寂寥感といった感情を伴う表現になりやすかったことも確かである。

六 まとめ

ここまで見てきたことは次のようにまとめられる。

・古代語の「くはつ」の基本的な意味は前項動詞が限界まで完全に実現することであり、その限界には「度合い・程度」「対象・範囲」「時間」等がある。

・古代語の「くはつ」には前項動詞が長きに及んだ事柄の帰着点であることを表す用法がある。

・古代語の「くはつ」はマイナス評価を伴うものが多いが、プラス評価のものも多数存在し、付加される評価は基本的に中立であった。

これらを踏まえて、さらに時代を下って「くはつ」の変化をたどるとともに、「くはる」との使い分けについて調査したい。

注

- (1) 姫野昌子「複合動詞の構造と意味用法」(ひつじ書房、一九九九年)
- (2) 杉村泰「事態の完遂・極限を表す複合動詞「VI・切る」「VI・果たす」「VI・果てる」について」(名古屋大学学術機関リポジトリ、二〇一三年)に、現代語の「くはてる」は「元々主体の持っていた生命力、活気、気力、記憶、能力などがこれ以上消えることができない所まで行きついたという極限状態を表す」との指摘がある。
- (3) 「くはつる」は23語中、変化動詞・情態動詞についての19語、そのうち明らかなマイナス評価をとまう語は16語、辞書のみでマイナスと言いつれない語が3語である。
- (4) 変化動詞について「死しおわる」がある。
- (5) 築島裕「平安時代の漢文訓読語につきての研究」(東京大学出版会、一九六三年)
- (6) 大坪併治「ヲハルとハツ」『岡大國文論稿』4 (岡山大学言語国語国文学会、一九七六年五月)
- (7) 万葉集で使われる「くはる」は「ことをはる」「公務を終了」に限られる。
- (8) 岡野幸夫「平安・鎌倉時代の和文における「はつ(果)」「をはる(終)」の意味用法―補助動詞的な複合動詞後項の通時的

研究のために―』『国文学攷』152(広島大学、一九九六年)

- (9) 成允廷「古代語の終了段階を表す複合動詞の後項要素についての考察―『源氏物語』の「はつ」、『今昔物語集』の「をはる」を中心に」『国文』99(お茶の水女子大学国語国文学会、二〇〇三年)

- (10) 東辻保和他『平安時代複合動詞索引』(清文堂、二〇〇三年)

- (11) 工藤真由美『アスペクト・テンス体系とテキスト―現代日本語の時間の表現―』(ひつじ書房、一九九五年)では、動詞を(A)外的運動動詞(主体動作・客体変化動詞、主体動作・主体変化動詞、主体変化動詞、主体動作動詞)、(B)内的情態動詞(C)静態動詞に分けていている。本稿ではこれを参考にしつつ、主体の動作か変化かという点に注目して4分類とした。

- (12) 情態動詞は厳密に言えば、変化動詞、動作動詞、状態動詞に分けられると思うが、話者の心情、評価についての分析を考えると、一つの分類項目とした。また、古代語では一つの動詞が心の動き・状態を表す場合と心情の表出としての動作を表す場合があるが、本稿ではそのような動詞は情態動詞としてある。

- (13) 中田祝夫他『古語大辞典』(小学館、一九九三年)

- (14) 北山谿太『源氏物語辞典』(平凡社、一九五七年)

- (15) (5)の「うつりはつ」のような使い方が多いため、「うつろひはつ」をマイナスの意ととってか「うつろひはてで」との説もあるが、「菊のまだよくもうつろひはてで、わざとつくろひたてさせたまへるは(源氏・宿木)」の例もあり、よい方向への変化と考えるとよいだろう。

《参考文献》

- 『日葡辞書邦訳』(岩波書店、一九八〇年)
奥田靖男「時間の表現(2)」『教育国語』95(むぎ書房、一九八八年)

鈴木泰「テンス・アスペクトを文法史にみる」『朝倉文法講座六』

(朝倉書店、二〇〇四年)

鈴木泰「古代日本語動詞のテンス・アスペクト―源氏物語の分析」(ひつじ書房、二〇〇〇年)

《テキスト》

『万葉集』(おうふう、一九七七年)

新日本古典文学大系『続日本紀』(岩波書店、一九八九年)

新日本古典文学大系『竹取物語』(岩波書店、一九五七年)

新日本古典文学大系『土左日記』(岩波書店、一九五七年)

新日本古典文学大系『伊勢物語』(岩波書店、一九五七年)

新日本古典文学大系『古今和歌集』(岩波書店、一九八九年)

新日本古典文学大系『後撰和歌集』(岩波書店、一九九〇年)

新日本古典文学大系『拾遺和歌集』(岩波書店、一九九〇年)

小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館、一九七六年)

小学館新編日本古典文学全集(オンラインデータベース)

『蜻蛉日記』『枕草子』『紫式部日記』『平中物語』『狭衣物語』

『栄花物語』『夜の寝覚』(とくもと あや 本学日本学研究所研究員)